学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要） 1
１． 美術学部 3
２． 美術研究科 6
３． 音楽学部 9
４． 音楽研究科 13
５． 映像研究科 18
６． 国際芸術創造研究科 21

注）現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。

東京芸術大学

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	教育活動の状況		教育成果の状況	
美術学部	【４】	特筆すべき高い質にある	【４】	特筆すべき高い質にある
美術研究科	【４】	特筆すべき高い質にある	【４】	特筆すべき高い質にある
音楽学部	【４】	特筆すべき高い質にある	【３】	高い質にある
音楽研究科	【４】	特筆すべき高い質にある	【４】	特筆すべき高い質にある
映像研究科	【３】	高い質にある	【３】	高い質にある
国際芸術創造研究科	【３】	高い質にある	【３】	高い質にある

１．美術学部

（　分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4　）

（　分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5　）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

海外提携校等との共同授業、ワークショップ、アートプロジェクト等により学生の海外での実践的制作発表活動等の活性化がなされている。また、企業等との産学連携プロジェクト、社会貢献プロジェクト等の多数の多彩な活動が展開され、特に「取手アートプロジェクト」などの社会実践型の芸術教育プログラムも行われている。

〔優れた点〕

○　社会的課題の解決や、地域社会・産業界からのニーズに即した社会実践型の芸術教育プログラムとして、茨城県取手市のアートプロジェクト、群馬県みなかみ町と NPO とによる芸術よる地域の町づくり、民間企業におけるインターンシップ、民間企業の協力によるテキスタイルの製作、染色工房の伝統技術等に係る事業・研究における実践などが優れた点としてあげられる。

○　平成 28 年度に「Art の力賞」「早暁賞」、平成 29 年度に「宮田亮平奨学金」を創設し、従来からの奨学金制度も含め、美術学部の学生を年間 50～60 名程度採用している。

○　美術学部の学生が、イギリスのロンドン芸術大学および AA スクール、デンマークのコリング・デザインスクール、ウガンダのマケレレ大学、シンガポールのラサール芸術大学、韓国伝統文化大学校との共同授業等に参加し、海外での実践的な学修・経験を積んだ。トルコのミマール・シナン美術大学およびアナドール大学、イスラエルのベツァルエル美術アカデミーとの国際共同プロジェクトを実施し、学生の相互派遣や国際共同ワークショップ等を展開した。美術学部の学生が、ラオス国立美術学校との国際共同アートプロジェクトやミャンマーのバガン漆芸技術大学との交流授業・共同展覧会等に参加し、海外における実践的な学修・経験を積んだ。

○　平成 28 年７月に、「芸術系大学コンソーシアム」を東京芸術大学主導により新たに設立した。令和元年度末時点で、58 大学が加盟している(国立４・公立 11・私立 43)。

〔特色ある点〕

○　平成 29 年度より毎年度、シャネルやセリーヌ等フランスを代表するラグジュアリーブランド 81 社と歴史的文化施設 14 団体により構成される文化機関「コ

ルベール委員会」と連携している。令和元年度より、東京芸術大学とブルガリジャパン株式会社が連携して行う文化支援プロジェクト「BVLGARI MECENATE／ブルガリ メチェナーテ」を開始した。

平成 30 年 10 月、東京藝術大学と民間企業との共同事業として、東京芸術大学上野キャンパス内に「藝大アートプラザ」を開設した。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

学生作品等が学外での展覧会・コンペティション・コンクール等で多数受賞・入選している。

〔優れた点〕

○　国内外の様々な展覧会・コンペティション・コンクール・学会等において、美術学部の学生および卒業生が多数受賞しており、国内および海外において多数の展覧会・学会発表等の活動も実施されている。

〔特色ある点〕

○　進学率は、毎年度 50%前後の高い数字で推移している。東京芸術大学大学院または海外の大学院へ留学する者が多く、高い専門性を基盤として継続的にステップアップを志す者が多い。卒業・修了生の大半は、独立か就職(正規雇用・非正規雇用)か等の形態によらず、社会において専門技能・知識を活かして「アーティストとしての活動」を実施している。

２．美術研究科

（　分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7　）

（　分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8　）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

パリ国立高等美術学校（フランス）及びロンドン芸術大学（英国）との国際共同授業である「グローバルアート国際共同カリキュラム」では、その成果が国際芸術祭「瀬戸内国際芸術祭」等で発表され、社会的にも高い評価を獲得している。また、世界展開力強化事業では美術研究科の学生が、カンボジア王立芸術大学（カンボジア）とアンコール遺跡の共同研究プログラム、及びインドシナ半島における絵画の技法・材料に関する共同研究等に参加している。

〔優れた点〕

○　平成 28 年度、芸術と社会とを繋ぐ人材の育成を強化する為、修士課程にグローバルアートプラクティス専攻を新たに設置し、カリキュラムの一環として毎年度、パリ国立高等美術学校（フランス）およびロンドン芸術大学（英国）との国際共同授業「グローバルアート国際共同カリキュラム」を実施している。国際共同カリキュラムでは、海外大学及び東京芸術大学学生が双方の国を訪れ、リサーチやディスカッション等を通して協働で作品制作等を実施し、それらはフランス世界遺産シャンボール城や、３年に１度開催される国際芸術祭「瀬戸内国際芸術祭」等において発表され、多くの来場者や評論家等から高い評価を受ける等、国際水準での教育研究成果を挙げている。

○　平成 28 年度に「Art の力賞」「早暁賞」、平成 29 年度に「あさかぜ賞」を創設し、従来からの奨学金制度も含め、美術研究科の学生を年間 50～60 名程度採用している。

○　大学の世界展開力強化事業(ASEAN)において美術研究科の学生は、カンボジア王立芸術大学とのアンコール遺跡の共同研究と石彫実習をカンボジアのアプサラ機構および日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）の協力を得て実施するプログラムや、ホーチミン市美術大学（ベトナム）とベトナム美術大学でのワークショップを通じたインドシナ半島における絵画の技法・材料に関する共同研究等に参加した。

〔特色ある点〕

○　社会実践型の学修の一環として、復興支援に係る取組を学生参加により実施しており、美術分野における一例としては、「東日本大震災被災文化財レスキ

ュープロジェクト」を実施し、陸前高田市立博物館所蔵の絵画作品の安定化処置を行い、津波の被害に遭い、汚損・塩害による作品の損傷に対し、研究室全体で修復作業に取り組んだ。

○　令和元年度には、茨城県取手の取手駅・駅ビル内に、新たなアート施設「たいけん美じゅつ場」をオープンし、施設内には「オープンアーカイブ」と呼ばれる展示空間や工作室、ライブラリー等を設け、東京芸術大学の新たな教育研究拠点としつつ、成果の恒常的な発信にも活用している。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

学生作品等が展覧会・コンペティション・コンクール・学会等で多数受賞・入選している。また、海外大学との交流展覧会を韓国のソウル大学校（韓国）、台湾赤粒画廊（台湾）、チェンマイ大学（タイ）、バガン漆芸技術大学（ミャンマー）、メルボルン大学（オーストラリア）、ユヴァスキュラ美術館（フィンランド）等で開催している。

〔優れた点〕

○　国内外の様々な展覧会・コンペティション・コンクール・学会等において、美術研究科の学生および修了生が多数の受賞をしており、東京芸術大学における学修の成果を発揮している。

〔特色ある点〕

○　海外大学との交流展覧会を、韓国のソウル大学校、台湾赤粒画廊、タイのチェンマイ大学、ミャンマーのバガン漆芸技術大学、オーストラリアのメルボルン大学、フィンランドのユヴァスキュラ美術館等で開催している。地域・産学連携等による成果を、茨城県大子町の県北芸術祭、福島県磐梯山慧日寺資料館、青森県酸ヶ湯温泉の旅館、上野動物園、浅草文化観光センター、天王洲セントラタワー、世界のカバン博物館等、各プロジェクトに係る場において展覧会等を開催し、公開・発信している。

３．音楽学部

（　分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10　）

（　分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12　）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

国際的に通用するアーティスト育成に向け、海外の水準の高い芸術系大学や音楽院等との交流活動を推進し、学生の海外での実践的な学修・経験の場を拡大している。その一環として、「大学の世界展開力強化事業」の採択を受けた「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」、学生の海外研修促進等につながる経済的支援やキャリア支援のための産業界等との連携による新たな奨学金の創設、「藝大レーベル」の立ち上げ・配信の取組を行っている。

〔優れた点〕

○　平成 30 年度に「江崎スカラーシップ」を創設し、従来からの奨学金制度も含め、音楽学部の学生を年間 50～60 名程度採用している。。

また、海外留学を希望する学生に対し 40 万円を一括給付する「海外留学支援奨学金」制度および、外部語学試験で成績を得た者を対象とする「語学学習奨励奨学金」を毎年度実施している。

加えて、音楽学部・研究科独自の支援制度として、平成 29 年度に「宗次徳二海外留学支援奨学金」が創設された。これは、海外の高等教育機関への留学や、海外で開催される国際コンクールへの参加、海外での実技指導者からのレッスン受講等を目指す学生に、最大で年額 200 万円の奨学金給付を行うものであり、世界トップアーティストの育成促進に繋がっている。

○　平成 29 年度に、音楽分野における学生のキャリア支援を目的に、世界三大音楽レーベルの一つである民間企業と連携し、東京芸術大学が主体となり「藝大レーベル」を立ち上げ、在学中における演奏音源をデジタル配信するという、国内の音楽大学では初となる取組を開始した。同年６月７日から配信リリースされた東京芸術大学の学生代表９組の演奏を収録したアルバム「東京藝大音楽学部 推薦学生によるクラシックから純邦楽まで！現在（いま）聴くべき究極（９曲）！」は iTunes クラシックチャートにて第１位になるなど、高い評価を得た。

○　平成 28 年度より、「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」として「大学の世界展開力強化事業(ASEAN)」の採択を受け、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイの５カ国に所在する８校の国立芸術系大学と連携し、相互の課題解決や特色を踏まえた交流を進める国際共同プロジェクト

を展開している。音楽学部の学生は、ミャンマー国立文化芸術大学、タイのシラパコーン大学、ベトナム国家音楽院との交流授業・共同演奏会等を実施し、海外における実践的な学修・経験を積んだ。

〔特色ある点〕

○　平成 30 年４月に東京芸術大学は、世界最高峰のオーケストラの一つであるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団員の養成を目的とする「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と、人材育成に係る協定を締結した。同アカデミーと大学とが人材育成に係る連携協定を締結するのは世界初であり、この協定の締結により同アカデミーのヴァイオリン部門に「東京藝術大学枠」が設けられ、試験が毎年行われ、合格者は２年間同アカデミーに留学でき、派遣者には寄附金を原資とする奨学金によりサポートが行われる。全国各地の子ども達を対象とした「早期教育プロジェクト（ＥＥＰ：Early Education Project）」や「中学生対象の早期英才プログラム（東京藝大ジュニア・アカデミー）」の実施、「スーパーグローバルハイスクール」に指定された附属音楽高等学校における教育プログラムの改革、「飛び入学」試験を起点とした「スペシャルソリストプログラム」の整備、ＳＧＵ事業等による海外一流演奏家のユニット誘致等の計画的な展開と併せて、この協定締結により、国際舞台で躍動する世界トップアーティストの戦略的育成に向けた一貫型人材育成プログラムが構築された。

○　平成 28 年度より、多様な学生を確保するため、国際バカロレア資格を含む外国学校出身者特別選抜を開始した。加えて、音楽学部スペシャルソリストプログラム（SSP：Special Soloist Program）のための「飛び入学試験」を実施し、成績優秀者として SSP で入学する者に対して、入学料・授業料が免除となる学生納付金免除制度を創設した。飛び入学試験については、これまでに２名の合格者が出ている。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

ミュンヘン国際音楽コンクール（チェロ部門）での日本人初優勝をはじめ、フランツ・リスト国際ピアノコンクール、ルトスワフスキ国際チェロコンクール、国際サクソフォンコンクール SAXGO18 等の世界を代表するコンクールを含む国内外の様々なコンクール、コンペティション、学会等において、学部生及び卒業生が多数受賞している。

〔優れた点〕

○　国内外の様々なコンクール・コンペティション・学会等において、音楽学部の学生および卒業生が多数の受賞をしており、東京芸術大学における学修の成果を発揮している。

特筆すべき実績としては、平成 28 年度の「フランツ・リスト国際ピアノコンクール」において器楽科の学部生が第１位を獲得、平成 29 年度の「ルトスワフスキ国際チェロコンクール」において器楽科の学部生が第１位および最優秀演奏特別賞を獲得、平成 30 年度には、音楽学部生が、スロヴェニアにおける第９回国際サクソフォンコンクール SAXGO18・第１位、オーストラリアにおける第 25 回ヨハネス・ブラームス国際コンクール・第２位、ロシアにおける第１回ヴィクトル・トレチャコフ国際ヴァイオリン・コンクール・第２位をそれぞれ獲得するなど、ヨーロッパを代表する数々のコンクールで成果を上げている。

また、令和元年度においても、歴史と伝統のある難関なコンクールとして知られる第 68 回ミュンヘン国際音楽コンクールにおけるチェロ部門での日本人初となる優勝のほか、第 26 回ブルクハルト国際音楽コンクール、第７回アドルフ・サックス国際コンクール、第 15 回ルーマニア国際音楽コンクール等において、音楽学部生(出身学生含む)が受賞をしている。

４．音楽研究科

（　分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14　）

（　分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16　）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と、人材育成に係る協定を締結し、音楽研究科修了生１名を同アカデミーへ２年間派遣している。また、平成 29 年度に宗次徳二海外留学支援奨学金が創設され、海外での実技指導者からのレッスン受講等を目指す学生に新たな奨学金を創設するなどの修学への経済支援を充実させている。また、アーツによる復興支援と地方創生プロジェクト等の芸術分野にしかできない復興支援、地方創生支援を実施し、さらに民間企業・自治体・官公庁等からの年間約 150 件の依頼演奏や、被災地における復興支援コンサートを開催している。

〔優れた点〕

○　平成 28 年度、芸術と社会とを繋ぐ人材の育成を強化する為、修士課程にオペラ専攻を新たに設置し、国際舞台で活躍する教員による世界最高水準の教育プログラムを実施した。

○　平成 30 年４月に東京芸術大学は、世界最高峰のオーケストラの一つであるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団員の養成を目的とする「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と、人材育成に係る協定を締結し、平成 30 年７月には東京芸術大学において、上記の協定に基づく「派遣者オーディション」の第１回目を実施し、合格した音楽研究科修了生１名について、同アカデミーへの２年間の派遣が決定した 。

○　平成 30 年度に「江崎スカラーシップ」を創設し、従来からの奨学金制度も含め、音楽研究科の学生を年間 30 名程度採用している。平成 29 年度に「宗次徳二海外留学支援奨学金」が創設された。これは、海外の高等教育機関への留学や、海外で開催される国際コンクールへの参加、海外での実技指導者からのレッスン受講等を目指す学生に、最大で年額 200 万円の奨学金を給付する制度である。

○　平成 29 年度に文化庁委託事業の一環として実施した「アーツによる復興支援と地方創生」プロジェクトで福島県において芸術分野にしかできない復興支援、地方創生支援を実施した。

〔特色ある点〕

○　海外大学、産業界、地方自治体等との連携プロジェクトをアクティブラーニングおよび実践的な学修の場として機能させており、韓国芸術総合学校との交流演奏会、東京都足立区北千住における市民との共同によるアートプロジェクト等を多数実施している。また、民間企業・自治体・官公庁等からの年間約 150 件の依頼演奏や、被災地における復興支援コンサートを開催した。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

平成 30 年第 67 回ミュンヘン国際音楽コンクールピアノ三重奏部門で、大学院音楽研究科修士課程在籍学生（チェロ）・博士後期課程在籍学生（ピアノ）・音楽研究科修了生（ヴァイオリン）の「葵トリオ」が第１位となっている。同部門での日本人の入賞は初である。同年には、音楽研究科博士後期課程の学生がイタリア モンテカティーニ国際オペラコンクールで優勝している。令和元年度には、第 56 回ブザンソン国際若手指揮者コンクールでは音楽研究科指揮専攻を修了した学生が第１位・オーケストラ賞・観客賞を獲得し、第 17 回チェコ音楽コンクールの声楽部門では音楽研究科の学生が第１位を獲得している。

〔優れた点〕

○　国内外の様々なコンクール・コンペティション・学会等において、音楽研究科の学生および修了生が多数受賞している。平成 30 年第 67 回「ミュンヘン国際音楽コンクール」ピアノ三重奏部門にて、東京芸術大学大学院音楽研究科の修士課程在籍学生（チェロ）・博士後期課程在籍学生（ピアノ）および音楽研究科修了生（ヴァイオリン・平成 30 年３月修士課程修了）で結成される「葵トリオ」が第１位に輝いた。同部門での日本人入賞は初の快挙となる。また同じく平成 30 年に、音楽研究科博士後期課程の学生がイタリア モンテカティーニ国際オペラコンクールで優勝している。令和元年度においても、フランスで開催された第 56 回ブザンソン国際若手指揮者コンクールにおいて、音楽学部指揮科を卒業および音楽研究科指揮専攻を修了した学生が第１位・オーケストラ賞・観客賞を獲得したほか、第 17 回チェコ音楽コンクールの声楽部門において音楽研究科の学生が第１位を獲得、26thInternational Johannes Brahms Competition のピアノ部門および声楽部門のそれぞれで音楽研究科の学生が第２位を獲得するなど、ヨーロッパを代表する数々のコンクールで成果を上げている。

〔特色ある点〕

○　平成 28 年度～平成 30 年度の進路状況調査の集計・分析結果では、音楽学部・研究科の卒業・修了生の大半は、独立か就職(正規雇用・非正規雇用)か等の形態によらず、社会において専門技能・知識を活かして「アーティストとし

ての活動」を実施している。

５．映像研究科

（　分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19　）

（　分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20　）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」として大学の世界展開力強化事業の採択を受け、海外８校の国立芸術系大学と連携し、国際共同プロジェクトを展開し、学生が東南アジア諸国連合の芸術大学において学修経験を積んでいる。

〔優れた点〕

○　平成 28 年度より、「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」として「大学の世界展開力強化事業(ASEAN)」の採択を受け、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイの５カ国に所在する８校の国立芸術系大学と連携し、相互の課題解決や特色を踏まえた交流を進める国際共同プロジェクトを展開している。映像研究科の学生は、ミャンマー国立文化芸術大学やタイのシラパコーン大学におけるアニメーション制作ワークショップ等に参加し、海外における実践的な学修・経験を積んだ。

〔特色ある点〕

○　平成 30 年度には、南カリフォルニア大学（USC）を連携機関として「日米ゲームクリエイション共同プログラム -メディア革新時代の新しいアーティスト育成-」を「大学の世界展開力強化事業」の採択を受けて新たに開始した。

○　令和元年度、大学院映像研究科にゲームを中心とした制作・研究等を行うことができる２年間の「ゲームコース」を新たに開設した。

○　「映像文化都市」を目指して各種施策を推進している横浜市と包括協定定書、覚書を交わして、教育施設の整備面に対する全面的な協力を受けるとともに、横浜市文化観光局主催の映像文化イベントにおける学生作品の上映会、音楽学部・音楽研究科の教員・学生との協力によるコンサート「馬車道コンサート」等を開催している。

○　令和元年度、ゲーム分野に係る研究の一環として、民間企業、横浜市立大学とともに、ゲーミフィケーションを用いた新たなデジタルヘルスケアソリューション創出へ向けて、Health Mock Lab.を発足した。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

国内外のコンペティションにおいて、映像、ドキュメンタリー、アニメーション、CG 等の分野で大賞、グランプリ、最優秀賞等の受賞が平成 28 年度から令和元年度の間に 84 件となっている。

〔優れた点〕

○　国内外の様々な映画祭・コンテスト・コンペティション等において、映像研究科の学生および修了生が多数受賞している。

〔特色ある点〕

○　修了生の大半は、独立か就職(正規雇用・非正規雇用)か等の形態によらず、社会において専門技能・知識を活かして「アーティストとしての活動」を実施している。

６．国際芸術創造研究科

（　分析項目Ⅰ　教育活動の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22　）

（　分析項目Ⅱ　教育成果の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　23　）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

カンボジア王立芸術大学とアートマネジメントに係る交流プログラムを実施したほか、ホーチミン市美術大学（ベトナム）との交流事業で実践的な学修を展開し、その成果物として冊子制作及び展覧会「三角測量」を開催している。

〔優れた点〕

○　海外大学との共同プロジェクトや海外実践型の教育プログラムの充実により、修士課程に係る指標番号５の「在学生の海外派遣率」について、国際芸術創造研究科を設置した 平成 28 年度以降毎年度、50％を上回っており、特に平成 29 年度は 84.6％という高い実績値を記録している。また、平成 30 年度に設置した博士後期課程においては、同指標の実績値は 100％である。

○　「大学の世界展開力強化事業(ASEAN)」において、国際芸術創造研究科の学生は、平成 29 年度に、カンボジア王立芸術大学とアートマネジメントに係る交流プログラムを実施したほか、ホーチミン市美術大学との交流事業として双方の教員・学生が共に東京・五島（長崎県）・ホーチミンにおけるリサーチ活動を行い、その成果物として冊子制作及び展覧会「三角測量」を開催した。

〔特色ある点〕

○　海外大学、産業界、地方自治体等との連携プロジェクトをアクティブラーニングおよび実践的な学修の場として機能させており、韓国総合芸術学校および国立台北芸術大学との三大学合同の共同研究会「ソウル／東京／台北・アートリサーチ・ワークショップ」を毎年度開催しており、また、東京都足立区北千住や茨城県取手市における市民との共同によるアートプロジェクト等を多数実施している。

○　平成 28 年度～令和元年度に、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ（英国）との具体的な交流として、二つのオリンピック都市をテーマしたワークショップの開催、公開シンポジウム「ポストメディア時代の芸術文化と理論」の開催等、様々な連携活動を展開した。コペンハーゲン大学（デンマーク）との共同研究プロジェクト「コラボレーション・コミュニティ・コンテンポラリーアート（CCCA）ワークショップ」を開催した。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

教育成果の社会への発信・還元として、国際芸術創造研究科の学生が国内外において多数の展覧会、演奏会、アートプロジェクト等に参画している。

〔優れた点〕

○　教育成果の社会への発信・還元として、国際芸術創造研究科の学生が国内外において多数の展覧会、演奏会、アートプロジェクト等に参画している。

〔特色ある点〕

○　令和元年度に、国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士課程の学生が、「Mercure des Arts 第５回年間企画賞」において第３位を獲得した。受賞作品はフランチェスカ・レロイ作曲・演出『鍵』である。